

塩田開発の父 —久米通賢—



讃岐高松藩藩主松平頼恕が坂出塩田の工事現場を視察に訪れたのはこれで何度目であろうか。その日は朝から相当に激しい雨が降っていたが、頼恕は用意された席に着くとすぐ「栄左衛門をよべ。」と命じた。

栄左衛門とは、郷普請奉行の久米栄左衛門のことである。今回の坂出塩田開発のすべてを任されている人物で、本名を「通賢」といい、栄左衛門は通称であった。

「がんばっているな。」頼恕は同行した藩の重役に声をかけた。工事現場では、雨にもかかわらず数千人の人々がいきいきと働いている。

しかし、重役はそれには答えず、何か恐ろしいものでも見るように海のほうを見つめていた。彼には、この工事で完成する塩田というものが、あまり具体的には想像できないらしい。当時、塩をつくるためには海水を太陽の力で乾燥させ、残った塩分を採集する方法がとられていた。塩田とはその海水を乾燥させるための、いわば巨大な浅いプールである。

このとき栄左衛門が作ろうとしていた塩田はおよそ132ヘクタール。それだけの面積に土手を築き、水門を設けて、海水の出入りを調節しなければならない。想像もつかない規模である。すでに2万両（今日の5億円ほど）もの大金が藩主の手元金（個人的な費用）から出費されていた。高松藩の財政はこの時期最悪の状態にあり、武士たちに対して儉約の命令も出され、とてもこのような大金を藩の正規の予算から出すことのできる状態ではなかったのである。このような大工事が本当に藩の財務の助けになるのか。重役の心には大きな疑問があった。

「久米栄左衛門でございます。」

その声にふりむき、平伏している男に視線を向けた重役は思わず、驚きと怒りの混じった声をあげた。

「栄左衛門。なんじゃその姿は。」

見れば、雨の中、水たまりの側で座っているその男は、髪を縄でくくりつけ、ぼろぼろのはんてんの上に蓑をかぶり、帯はわらなわである。しかも、わらじすら履かず、はだしの足はどろだらけであった。

「殿の御前であるぞ。何というみすぼらしい姿だ。場所がらをわきましろ。」

重役の言葉に、栄左衛門は地面を見つめたまま静かに答えた。

「わたくしは、毎日この姿でみんなに指図をあたえています。決して無礼をはたらこうとして、わざわざこの姿をしているわけではありません。この身を投げうっての意気込みがあればこそ、人々もあのように元気に働いてくれていると、思っております。」

この言葉に重役は一瞬たじろいだ。だが彼には栄左衛門の言い分を認めてやる余裕がない。そもそもこの工事自体に彼は反対であった。栄左衛門が自分から建白書を差し出し、自分で計画した工事である。もし、成功すればすべて栄左衛門の功績となるであろう。

「栄左衛門、よく聞け。そなたは仮にも讃岐高松藩15万石の奉行職にある身。その奉行たる身が、そのような姿で人々の前に立てばどうなる。藩の権威も、殿の御威光も、人々は軽く考えるようになるではないか。そなたは郷普請奉行としてこの工事のすべてを任されていることを忘れたのではないか。」

栄左衛門ははじめて顔を上げ、重役を見た。その目に怒りの色はなく、あくまでも冷静である。

「わたくしは、郷普請奉行であるからこの工事を指図しているわけではありません。この工事はわたくしから殿様
にお願ひし、やらせていただいているのであります。それは、この塩田の完成が、讃岐のすべての人々の助けに
なると信じているからです。」

「何を言う。この藩の財務の苦しい中で、殿様から2万両もの大金をいただき、奉行としてではないなどともよく
も言えたな。」

「2万両はたしかに大金……。」

と、そこまで言って栄左衛門は口をつぐんだ。目の前にいるよりひろ頼恕をはばかりだったのであろう。殿のてもときん手元金から下され
た2万両はこの時既に底をついていた。栄左衛門は工事を続けるため、自分の屋敷や土地まで借金のていとう抵当に入
れていた。そのことをこの重役は知らないのだろうか。あるいは知っていながら知らぬふりをしているのだろうか。
いや、重役のことはいい。よりひろ頼恕自身はどうであろう。この殿様はこれだけの大工事が2万両で完成すると思っ
ているのだろうか。

「どうじゃ、そなた……。」

重役がさらに言葉を続けようとしたとき、はじめてよりひろ頼恕が口を開いた。

「もうよい。」

よりひろ頼恕はまっすぐ栄左衛門を見つめ、そして言葉を続けた。

「栄左衛門ゆるす。わたしの近くまでよって参れ。」

栄左衛門は一瞬何を言われたのか分からなかった。だが、
すぐに、

「ははあ。」

返事をする、わずかにひざ膝を進めてよりひろ頼恕に近づいた。

「いや、そうではない。このかさ傘の中に入れと申しておる
のじゃ。そこでは雨に打たれて寒かろう。」

「しかし。」

栄左衛門はえんりよ遠慮して少ししか進まない。

「早く。」

よりひろ頼恕の激しい声が響く。栄左衛門は決意して、立ち上がると、

「御免。」

と叫んで進みより、傘の中で両手をついた。

「顔を見せてくれ。」よりひろ頼恕の声に、栄左衛門は顔をあげて、よりひろ頼恕を見た。

よりひろ頼恕は栄左衛門の手をとり、そして言った。

「塩田のことは、すべてそのほう方に任せる。どうかよろしく頼む。」

栄左衛門には、よりひろ頼恕の目に光っているのは雨の粒ではないように感じられた。



坂出塩田の工事は、1829（文政12）年8月、完成した。着工から3年5カ月の後である。

藩主よりひろ頼恕は、栄左衛門の功労を賞して、坂出塩田の碑を建立している。この碑は現在も残っており、塩田工事の
ころの苦難を今に伝えている。